

(別紙 1)

論文の内容の要旨

論文題目 ジャーミー (‘Abd al-Raḥmān Jāmī) の信仰における存在一性論と修行論
氏名 宋 暎恩

本論文は15世紀ホラーサーン地域を代表する宗教者の一人であるジャーミー (Nūr al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān Aḥmad Jāmī, d.1492) の信仰を存在一性論的思想とスーフイーの宗教的実践という二つの観点から考察する。ジャーミーに関する今までの主な研究は、彼の存在一性論のみに集中するか、彼の詩における文学的意義だけを強調しており、彼が一人の宗教者として求めた最終的な目的にはあまり注目して来なかった。この論文で彼の思想と修行を同時に視野に入れるのは、この二つの側面がそれぞれ神と人間の関係を理解するための抽象的理論と神に近づくための実践的努力となっているからであり、両方とも真なる神への信仰に欠かせないものである。つまり、ジャーミーにとって存在一性論とスーフイーの修行法は、神と世界、神と人間の関係を全体的に理解し、創造主である神と被造物との間にあるべき関係を実際に回復することを意味するのである。したがって、存在一性論とスーフイーの修行はジャーミーの信仰を構成する二つの軸となっており、存在するすべての源である唯一の絶対的な神へ戻るという究極的な目的地へ宗教者を導くものと見ることができる。

しかし、イブン・アラビーから始まった存在一性論は、多くのスーフイーに受け入れられたのにもかかわらず、長きにわたって異端論争に巻き込まれてきた。またジャーミーが属していたイスラーム神秘主義教団であるナクシュバンディー教団は、当時ヘラートのティムール王朝と密接なかわりを持っていたため、政治的な色の濃いスーフイー集団と見られがちであった。そのため、ジャーミーに対しても存在一性論に関する彼の理論的注釈、もしくは彼と当時の支配者たちとの関係に着目することが多く、一時代を代表する宗教者として彼を評価し、その宗教的理想を考察することはなかった。そのため、本論文では存在一性論者であり、神秘主義教団のスーフイーであるジャーミーの姿を二つに分けることはせず、存在一性論とスーフイー的実践は彼の信仰の中に統合された二つの面であると見、そこにジャーミーが求めていたイスラーム的世界観が現れていると考えた。

若きジャーミーは卓越した学問的能力を認められ、当時の学界では非常に高く評

価されていたにもかかわらず、自らナクシュバンディー教団に入って修行者となり、その後存在一性論に関する多くの書物を著した。存在一性論はナクシュバンディー教団の中ではその伝統が途絶えていたが、彼によって復活したのである。このような観点から存在一性論者であると同時に、神秘主義教団のスーフィーというジャーミーの姿は、彼が存在一性論者の門下で勉強したとか、ナクシュバンディー教団の伝統を受け継いだとかからではなく、彼自身の選択によって作られたものであると考えることができる。

具体的にジャーミーの信仰において存在一性論とスーフィーの修行がどのような関係性を持っているかを考察するに先立って、この論文の第一章では、ジャーミーが生きていたティムール朝の宗教的環境について叙述した。ジャーミーが修学したヘラートとサマルカンドの宗教、思想的環境を見るために、特にチャガタイ系のティムール王朝が自らをイスラーム的政権として位置づけるために整えた宗教、教育制度について簡単に述べた。また当時のホラーサーンではマフディーを名乗るカリスマ的な人物が中心となり、メシア的思想を基に大衆を集める宗教グループがいくつもあった。その中でもヌールバフシーヤやフルーフイーヤの活動を、ジャーミーが受け入れなかったことに注目し、彼が求めたイスラームはメシア的カリスマに頼るものではなかったと考えた。

第二章はジャーミーの学問的背景と彼の作品に関して叙述した。ジャーミーの伝記については既にいくつも研究がなされており、彼の文学や存在一性論的作品は多くの注目を集めてきた。従って、本論文ではジャーミーの生涯や作品を全体的に概観することはせず、彼が存在一性論とスーフィーの道を選択した背景と、彼の著作に存在一性論とスーフィー的修行がどのように反映しているかに注目した。最初にジャーミーが存在一性論者のスーフィーになる以前の学問的履歴に焦点を当て、彼の思想形成に影響を及ぼした学問について述べた。次に彼の作品をジャンル別ではなく、存在一性論とスーフィーの修行という二つのテーマを中心に分類した。それによって、ジャーミーがジュルジャーニーやタフターザーニーの神学のような当時の主流神学で高く評価されていたにもかかわらず、それに満足できず、存在一性論とスーフィー的修行の道を選んだことを確認した。

第三章ではジャーミーの信仰における一つの軸としての存在一性論について述べた。具体的にはジャーミーが『尊い真珠 (*al-Durra al-Fākhira*)』で議論した内容を中心に、存在に関する短い論文である『存在に関する論考 (*Risāla fī al-wujūd*)』および、『*Fuṣūṣ*』の要約版の注釈に対する批評的テキスト (*Naqd al-Nuṣūṣ fī Sharḥ Naqsh al-Fuṣūṣ*)』の序文にある存在一性論の解説と一緒に検討した。特に『尊い真珠』に注目したのは、この書が神の存在、本体と属性、そして一から多の流出といった古典的な

イスラームの神学議論を扱っているからである。またこれらのテーマは、啓示と合理主義、伝統と理性、神の全能性と人間の倫理といったイスラーム信仰における根本的な問いかけに関わるものでもある。ジャーミーは神学者と哲学者の間で議論されてきたこれらの神学的問題について、存在一性論が最も優れた見解を提示していると考えた。彼は思想史的観点から神学と哲学、そして哲学と存在一性論の間で展開されてきた様々な議論の論点を明晰に要約することで、啓示に随順する神学的伝統と合理主義を重視する哲学的理性との両者における認識論的限界を明示し、最終的に開示的認識に基づく存在一性論の優越性を強調する。この議論によって、ジャーミーが若い頃から研鑽を積み、自家薬籠中のものとしていた神学や哲学ではなく、存在一性論を自らの最終的思想としてなぜ受け入れたか、その理由が理解される。

第四章ではジャーミーのスーフィーとしての姿と彼が提案している宗教的実践に焦点を当てた。まずは、スーフィーの模範であり、スーフィーたちが到達すべき境地を示すスーフィー聖者たちの列伝集、『親交の息吹 (*Nafahāt al-Uns*)』におけるジャーミーの聖者観を考察した。それから多くの聖者グループの中でもイブン・アラビーを含む存在一性論者たちが一つのグループをなしており、他の聖者グループとの霊的つながりが提示されていることに注目した。ジャーミーは存在一性論とスーフィーの神体験が相通じると見ているため、存在一性論の抽象的概念とスーフィー聖者の逸話に見られる奇蹟が同一の霊的境地を指していると考えられることができる。

スーフィーの神的体験と存在一性論が根本的には同一の霊的世界観を表現していると見るジャーミーの考え方は、スーフィーの神秘的言葉を存在一性論的観点から解説した作品の中にも現われている。具体的にはスーフィーの偉大な霊的師匠であるイラーキーとルーミーの作品に対する二つの注釈、『閃光の輝き (*Ashī‘at al-Lama‘āt*)』と『マスナウィーの二句に対する注釈 (*Sharḥ-i Baytayn-i Mathnawī*)』を通じて、スーフィーの体験に対する文学的表現が存在一性論的観点からどう説明されるかを考察した。

最後はスーフィーとしてジャーミーが実際に重視した宗教的実践と彼の霊的境地について述べた。特にジャーミー自身の宗教的実践とそれを通じて到達した霊的境地が存在一性論的観点からはどのように解釈されているかを考察した。そのために、ジャーミーの愛弟子、ラーリーが自分の師匠について叙述した『親交の息吹に対する傍注的補足 (*Takmilah-i Hawāshī-yi Nafahāt al-Uns*)』と修行法に関するジャーミーの短い論文『熟練の書 (*Risālah-i Sar Rashtah*)』、これら二つの論考の記述を通して霊的師匠としてのジャーミーの姿を検討した。次にジャーミーの『存在一性論に関する四行詩注釈 (*Sharḥ-i Rubā‘iyāt dar Waḥdat-i Wujūd*)』に現われた存在一性論とスーフィーの宗教的実践の関係について述べた。これによって、ジャーミーにとって存在一性論

の顕現論とスーフィーの宗教的実践は、神から多の被造物が顕現する下降の過程と被造物である修行者がすべての根源である神へ回帰する上昇の過程として対応的關係にあると考えることができる。

モンゴルの侵略もあり、当時のホラーサーン地域は様々な文化的、宗教的要素が混在する複合的状況にあった。このような状況の中でその時代に適したイスラームはどのようなものであるべきか模索が行われ、ジャーミーは神学や哲学という当時の主流の学問では見出せなかったイスラームの信仰、すなわち神へ至る道、を存在一性論とスーフィーの宗教的実践に見出した。彼のイスラーム信仰は一なる創造主と被造物との関係を正しく理解し、その関係を回復することに重きがあると考えられる。存在一性論者が語る一なる存在の顕現と、その他のスーフィー聖者が語る神秘家的言動は、いずれも神に近接する靈的境地を指しており、スーフィーの正しい実践法によって到達できるものであったのである。